

植生図から読み解く地域の自然と歴史

北海道 北ノ森自然伝習所主宰 三木 昇

1. はじめに

植生図は地域の自然環境を図示したきわめて重要な図面である。しかし残念ながら、植生図が活用されることはなく眠っているのが実情である。地域の自然環境の保全を進める立場にある郷土博物館の理系学芸員ですらその活用法がわからないと思われる。

このような現状を長年植生図作成にかかわってきたものとして残念に思っていた。機会を得てサロベツ湿原センターと倶知安風土館で植生図への理解を深めてもらう催しを行うことができたので、概要を紹介する。

2. 活動の概要

(1) 活動の目的

- ・参加者に植生図を見てもらい、地域にどのような植物群落があるかを知ってもらう。
- ・植生図をもとに現地を見学したり古い資料などを調べ、地域の自然の現状を理解してもらう。
- ・これらの学習から地域の原植生を見出し、自然環境の保全に関心をもってもらう。

(2) 活動の進め方

- ・地域の博物館における植生図の展示、セミナー開催、調査、さらには開拓時の自然がわかる資料の展示といったように、博物館を拠点に発信を行う。
- ・地域コアの人たち（自然愛好家やスキーのガイド）を巻き込む。
- ・自然探勝ガイドブックの作成、地域の自然 100 選の指定など、さらに社会的な影響を及ぼす活動を目指す。

植生図セミナーの概要を表 1 に示す。

表 1 植生図セミナーの概要

	サロベツ	倶知安
開催場所	サロベツ湿原センター	倶知安風土館
テーマ	自然観察市民講座「伝授！植物たちの声の聴きかた-開拓の歴史を植生図からひもとく」	「大地の装い-植生図から読めること」
開催日	2014年10月18日	2015年2月21日、3月26日
	午前座学、午後野外	夜座学 ※他に事前の現地調査
使用植生図(1/25,000)	674155 豊徳 674145 稚咲内 674156 豊富	644026 倶知安 674156 羊蹄山
参加者	約 30 人	約 30 人

3. 活動内容

サロベツ地区、倶知安地区の植生図セミナーは次のような流れにより実施した。

(1) 植生図への導入

植物好きの参加者は個々のきれいな花や希少な植物には関心があるが、植物のまとまりとしての植生（植物群落）というものになると、全くと言っていいほど関心がないのがふつうである。植生図の具体的な内容への手がかりとなるように、事前に日頃見慣れた植生のその地域での例を現地で取材し、写真や解説資料をまとめて展示した（写真1）。事前準備には博物館学芸員や地域のコアの人たちも参加してもらった。

(2) 身近な植生から植生図を読み解く

セミナーでは、まず、参加者が日頃見慣れている農地、植林地、雑木林といった身近な植生の写真を掲げ、その内容を説明した。また、数人のグループで話し合いながら自分の住んでいる場所の植生と植生図を一致させる作業を進めた（写真2）。これは、少しでも植生図が読み取れたという実感を持つ重要な作業である。

(3) 自然性の高い植生を確かめる

次に、地域にとって自然性の高い植生についてみていく。それは地域の国立公園や自然環境保全地域に指定され自然性の高い場所にみられる。遠足などで行ったことがあり知らない風景ではない。それらの場所の現地写真と航空写真を提示し、植生の内容や地域にとっての意味を解説した。施設の床に貼られている大きな航空写真も役立つ。

そして、はじめに確認した身近な里山の植生（倶知安地区ではカラマツ植林や雑木林であるシラカンバーミズナラ群落）と、遠くにある原植生（羊蹄山山頂のコケモローハイマツ群集や山麓のトドマツミズナラ群落）との違いについて理解を深める。これは原植生の意味を知る大切な作業である。



写真1

植生図の展示と凡例の解説および写真
セミナー事前展示 倶知安風土館



写真2

身近な場所の植生を確かめる
サロベツ湿原センター

(4) 植生図作成手順の理解

植生図の作成手順とその実際を説明した。すなわち、現地踏査を行い植生を認識し、航空写真を判読し、植生により地域を色分けした図が植生図であることを具体例を示して理解してもらう。(写真3)。

(5) 野外見学

サロベツ地区では座学の後に野外見学を行い、見慣れているところだけでなく、日ごろあまり見ない自然植生が断片的に残っているところも回った。湿原のヌマガヤの退行型、稚咲内砂丘林、稚咲内海岸などについて現地で植生と植生図とを結びつけ、構成種、立地、履歴など詳細な内容を解説し、さらに人間の開発の歴史と植生への影響を考えた(写真4)。

倶知安地区では事前準備で現地調査を行い、植生の展示物としてまとめた(写真5)。



写真3

植生図を示しながら説明
床の大きな航空写真も活用
倶知安風土館



写真4

現地と植生図を照合する
現地セミナー(咲稚内砂丘林)
サロベツ湿原センター



写真5

現地と植生図を照合する
現地セミナー
倶知安風土館

4. 今後に向けて－郷土の原植生を探す

北海道は開道 100 年とはいうものの概ねの原植生は失われてしまった。しかし、地域に原初的な自然植生を類推できる断片が残されている場合がある。今のうちなら地域の原植生をとどめることができる可能性がある。そうした場所は地域の植物のみならず動物相においても自然環境が残された場所でもある。写真や郷土史でしかみることができなかった開拓前の風景を探し残そうとセミナーで提案をする。このような郷土史からのアプローチは人々に自然と歴史へのより深い理解を得るために重要な視点である。

たとえば、倶知安では町の最初の軽工業はドロノキを利用した燐寸の軸木工場であった。「明治二十六年燐寸軸木製造工場起り」としか記録がないが、植生図の目でみていくと、川沿いのハルニレ群落にわずかのドロノキ高木林があり、これが町の産業を支えたことは容易に想像がつく。そして残存するドロノキ群落が地域にとってどのような意味があるのかを理解することができる。

少なくとも地域の自然について関心のある人たちに対してこのような講座を設けることは、きれいな花、希少な植物の保全という特定の種への関心から一歩進んで、植生の広がり、つまり面として自然環境の保全に関心を持ってもらうことにつながる。

今後も関心のある博物館などの教育機関に働きかけ、植生図を活用し「植生図から読み解く地域の自然と歴史」をテーマに活動を継続することを考えている。

2016. 3. 1